

【翻刻紹介】

天理大学附属天理図書館蔵 『新長谷寺縁起』

The “Engi” Document of the Sinhase Temple belong  
to the Tenri Central Library : A Transcription

日 沖 敦 子

Atsuko HIOKI

---

*Studies in Humanities and Cultures*

---

No. 7

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 『人間文化研究』 抜刷 7号  
2007年6月

**GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES**

NAGOYA CITY UNIVERSITY

NAGOYA JAPAN

JUNE 2007

## 【翻刻紹介】

## 天理大学附属天理図書館蔵 『新長谷寺縁起』

日 沖 敦 子

**要旨** 天理大学附属天理図書館吉田文庫が所蔵する『新長谷寺縁起』を紹介する。同文庫には、『新長谷寺縁起』四伝本が蔵されている。星田公一氏<sup>(1)</sup>は、この縁起を藤原山蔭に関する説話や物語に関わるものとして早く指摘された。しかしながら、近世中期に下る成立の縁起であるためか、翻刻されることはなかったようである。『新長谷寺縁起』は、事柄を述べる順序や文量（亀の報恩譚と総持寺創建に至るまでの経緯に関する説話を詳述するか否かなど）に違いが見られ、二系統に分類できる。ここでは、本文系統を異にする二伝本を紹介する。筆者は、本誌第四号（二〇〇六年一月刊）で、大阪府茨木市常称寺が蔵する『総持寺縁起絵巻』を紹介した。総持寺の創建由来として、藤原山蔭の説話や物語は繰り返し伝えられ、近世期には豪華絢爛たる縁起絵巻が制作された。総持寺及びその近隣の常称寺でこのような縁起絵巻が制作される一方、藤原山蔭に由緒を求め、総持寺や常称寺に伝わる縁起と重なる内容を持ちつつも独自の縁起を持ち伝えていたのが新長谷寺である。明治の神仏

人間文化研究 7 二〇〇七年

分離により、神楽岡西にあった新長谷寺は、真如堂内に移され、天台寺院となり、今は十一面観音像一体が安置されているのみである。吉田にあった当時は、藤原山蔭に纏わる縁起を参詣者に説いた様子が『東西歴史記』などの近世資料から読み取れる。伝本の位置づけなど内容の検討は、別稿に解題として記したい。

## 【註】

(1) 星田公一「研究ノート 山蔭中納言のことなど」(『同志社大学大学院研究会報』第八号、一九七七)

キーワード…縁起、新長谷寺、藤原山蔭

天理大学附属天理図書館吉田文庫が所蔵する『新長谷寺縁起』を紹介する。

## 一、『新長谷寺縁起』の伝本と書誌

同文庫には、『新長谷寺縁起』四伝本が蔵されている。

- A ① 吉田山新長谷寺縁起 (写軸一卷/吉三四一六八)  
 ② 新長谷寺縁起 (写軸一卷/吉三四一七七)  
 ③ 新長谷寺縁起 (写軸一卷/吉三四一七八)

B 新長谷寺縁起 (写軸一卷/吉三四一七六)

事柄を述べる順序や内容(亀の報恩譚と総持寺創建に至るまでの経緯に関する説話を詳述するか否かなど)に違いが見られることから二系統に分類でき、本紹介では、本文系統を異にする二伝本を紹介する。まず、翻刻する伝本の略書誌を記す。両伝本とも外題なし、または後補の外題であり、内題もないため、仮題として、本稿では『吉田文庫神道書目録』(天理図書館編、一九六五)の書名に従っておきたい。

〔書誌一〕『(新長谷寺縁起)』元禄八年(二六九五)写、一卷

所蔵 天理大学附属天理図書館吉田文庫(吉三四一七八)

表紙 後補表紙、常磐色地模様入繡表紙

見返 布目入金紙

外題 なし

内題 なし

寸法 二九・六×三四三・四糎

字高 二二・二糎

料紙 楮紙

本文 吉田文庫蔵『吉田山新長谷寺縁起』(吉三四一六八)、『新長谷

寺縁起』(吉三四一七七)と概ね一致する。

奥書 「右縁起者、左金吾雅豊卿所被/書写也。別有一卷者、近衛博

陸公/真跡也。住持沙門玄智需予/奥書。因合馳禿筆訖。/元

禄八年十二月廿一日 左武衛卜部朝臣(花押)>(\*句読点等私

付)

備考 木箱入。上蓋に紙が添付されていた様だが現存せず未詳。料紙裏に金切箔散。奥書の記述を『公卿補任』で確認すると、この

縁起は、元禄八年に左衛門督であった飛鳥井雅豊(一六六四—一七二二)により書かれたものであること、また、同年に左兵衛督であった卜部兼連「吉田兼敬」(一六五三—一七三二)によつて奥書が記されたことがわかる。近衛関白は、近衛基熙(一六四八—一七二二)であると考えられるが、基熙筆の縁起

に関して未詳。また、当時、新長谷寺住持であったという玄智は、延宝九年(一六八一)成立の『東西歴覽記』に名前が確認でき、同一人物と考えられる。吉田文庫蔵「新長谷寺関係書類」(吉三四一七三)によると、玄智は正徳五年(一七一五)六月五日に没している。

〔書誌二〕『(新長谷寺縁起)』江戸中期頃写、一卷

所蔵 天理大学附属天理図書館吉田文庫(吉三四一七六)

表紙 後補表紙、茶色地模様入繡表紙

見返 布目入金紙

外題 後補題簽「新長谷寺縁起」

内題 なし

寸法 二七・六×四六三・四糎

字高 二二・四糎

料紙 楮紙

本文 先に示したA系統の本文(吉三四一六八・吉三四一七七・吉三  
四一七八)とは別系統の本文。

奥書 なし

備考 木箱入。上蓋に「当寺縁起 兼好法師筆」と墨書された紙を添  
付。

## 二、翻刻

### 〔凡例〕

翻刻に際し、以下の方針を取った。

- 一、底本に忠実を期し、改行は底本のままとした。
- 一、私に句読点を付し、読解の便宜を図った。
- 一、旧字体・異体字は、通行字体に改めた。但し、総持寺、播磨国の  
表記は、底本通り「惣持寺」「幡磨国」と記した。
- 一、補入は行頭に\*を付し、本行に加えた。
- 一、虫損汚損による判読不能箇所は□で示した。
- 一、私に傍記した部分については、全て丸括弧にくくって示した。

### 〔註記〕

一、〔翻刻二〕の\*を付した三行(御井によって香木に彫られた銘文  
を記した部分)は、他の行に比べ小さな文字で書き込まれており、

前後の詞書を書いた後に、書き加えられたと考えられる。

〔附記〕本書の閲覧及び翻刻を許可していただいた天理大学附属天理

図書館に記して深謝申し上げる。

〔翻刻二〕天理大学附属天理図書館吉田文庫蔵『新長谷寺縁起』(吉

三四一七八)

それ吉田山新長谷寺は、陽成院の

御宇、中納言山蔭卿の建立也。本尊は、

十一面の観世音。頂上仏と宝冠の弥

陀は、春日大明神のさつけさせ給ふ也。

むかし、称徳天皇神護景雲元年

丁未の歳、春日大明神、ひたちの国鹿

島より三笠山へうつらせ給ふとき、供奉に

さふらひける中臣の時風・秀行といひける

に、伊賀国なはりの郡夏身の郷と云

所にて神宣有けらく、すゑの代に皇居

とならむ東にあたりて必ず垂跡ある

へし。なれらかうみの子の八十つゝきたゆ

ることなうつかへまつるへしと云々。そのかみ

ふたりか中へ壱つの焼栗を給ひける。

植をきければ、生ひ出て枝葉さかへけると

なむ。はたして、陽成院の御宇、元慶

六年壬寅のとし四月中の子の日、平安

城のひんかし神樂岡のふもとに降臨

ありき。そのころ此里に山蔭の中納言

しるよししてすみ給ひける。ある夜の夢

に、老翁一人、柵のえたをもち、南庭に

たつ。誰人ならむとあやしひ問に、我はこれ

かいひやくの初より、天照大神のみこと

のりによりて、天孫にそひまつり、宝祚

をまもりたてまつる。三笠山の老仙なり。

今、平安城の東に勝地をたつぬるに、

此所なりと宣ふ。依てあけの日、庭上に

くたり、そなたにむかひて神拝せられ

ければ、白鷺さかきの枝をふくみて宿

所の東に飛くたり、又、白鹿四頭、忽然と

して来る。此鷲ふくめるさかきを山蔭脚

にさつしたり。神宣奇瑞、一ならねば、すな

はち、そこに宮居つくりて春日大明神

を勧請せらる。又、神宮寺をたて、本地の

法味をくはへんとするに、此卿、そのかみ、はり

まの権守にてありしとき、惣持寺の本尊

をつくりまつらんと、みそきをもろこしにとめえ

て、はせの観音に作人をいのり申給ひしに、

大士、童男の身を現し、千日こもらせ

給ひて、かの尊容をつくり給ふ。件の仏跡

この地なれば、則、観音をあかめまつり、新

長谷寺をたてむとす。心中所願する人なし。

たちまちに白翁現し、頂上仏と宝冠の

弥陀をさつけ給ふ。納言不思議のおもひ

をなし、たれ人そととひ給ふに、かの老仙とて、

南をさして飛去ましぬ。さてこそ、まかふすち

なく春日大明神のさつけますとはしられ

けれ。やがて、南京はつせをうつし、四尺四方の

石座にこの本尊を安置す。そのうち、一

条院の母后、東三条の女院と申たて

まつるは、大入道兼家公の御むすめ円

融院の皇后也。当寺御再興の事

ありて、長保三甲寅の年六月一日

上棟、八月十八日供養の日は、慈恵大師

の直弟恵心院の僧都を導師に

請せらる。前後七日、紫雲たなびき、天花

雪のことし。春日の若宮、白山大権現、大弁

才天御影向と云々。当寺鎮守の社是也。

かの女院、当社当寺を御信仰まし〜て、御こゝろをかたふけさせ給ふ故、ねかひとねかはせ給ふ事、成就せずといふことなかりき。

一条院永延元年に、此かすかを勅祭になさせ給ふて、同十一月中の申の日、行幸

みことのりして、右大臣清磨公七世の孫神祇大副下部兼延の宿祿をあつ

かりとし、彼時風・秀行二流の子孫を祠官として、兼延宿祿につけくたさる。

御帝御崇敬ありて、卯月中の子の日降臨の日なれば、夏まつりとし、十一月

中の申の日、奈良まつりに准して、冬祭とさたむ。依て上撰祿大臣より

下土農工商にいたるまで、信敬の首をかたふけすといふ事なし。長和五年

丙辰のとし、御堂関白殿下御自筆の御書を兼延宿祿にたまはりて、奈良

の京にては三笠山を氏社氏寺とす。平安城のことは、吉田をもて三笠山

に准して崇敬あるへしと云々。

抑、中納言山蔭卿は房前卿より六世の

孫、越前守高房の御子、御母は真夏卿

の御むすめ也。此卿、常に信心善根におはして、仏神の内意にかなひ、すてに奇特をあらはし給ふ。神明降臨の清淨

地といひ、薩埵影向の靈妙場といひ、此御社此御寺へたれかはまうてさらん。又、

頂上仏、宝冠の弥陀は、是かすかのさつけさせ給。因茲迷妄の衆生、神仏

二見の想を破り、ひろく一心の源にかへるへし。凡聖もと無隙、智愚ともに信心を

おこせ、一たひあゆみをはこふともから結縁いかてむなしからん。惣して、無数の菩薩

の中に観音の功德ことにすくれ、塵刹の衆生の間我國の因縁もつともふかし。

ねかはくは、あまねく大悲の靈感に応したてまつらんことを。冥薫加被力、い

にしへ、いまにことなるなきものをや。貴賤男女、老若僧俗、常念恭敬をこた

らすは、つゐにはかりなき福寿を得たてまつらんものなり。

右縁起者、左金吾雅豊卿所被

書写也。別有一卷者、近衛博陸公

真跡也。住持沙門玄智需予

奥書。因令馳秃筆訖。

元禄八年十二月廿一日 左武衛卜部朝臣（花押）

〔翻刻二〕天理大学附属天理図書館吉田文庫蔵『新長谷寺縁起』（吉

三四―七六）

山城の国吉田山新長谷寺ときこゆるは、  
本尊観世普菩薩にてわたらせ給ふ。

愛宕の郡粟田の郷なり。むかし、

陽成院の御宇に藤原朝臣高房と

いふ人いまそかりけり。淡海公より五代の孫

にて越前守なりし。その守の子、山蔭の中納言

といひし。またいとけなかりし時、父の朝臣、鎮

西の方へしるよしありて下り給ふけるに、

淀の穂積のあたりにて、一人の鵜飼か生

ける亀をとりもてとかくしけるを、高房

朝臣、世（に）も（に）うたてき事におほへて、おほく

のあしをつかはして、亀を水にはなち給ぬ。

その日たれ時に、いかにしつるならん、かの具し

たる児を水におとし入ぬ。いとあさまし

といふもさら也。そのかみ、波いとはけしうて

すへきやうもなければ、父の朝臣かなしひに

堪て、かくらくや初瀬の菩薩に祈り申て

いはく、設決定応受報なりとも、定業亦

能転の方便を以て、ふたゝひあか子を見せ

させ給へとそこはくの願を立て給ひ、ことに

千手の尊像を造り奉らんと念して、

舟をたゝちに押もとしつゝ、そゝろに都

に帰らんとし給ふける時、きのふはなつ処の

亀あやまたす児ををのか甲に負て、

波の上に浮き来ぬ。忍を知り、まことをいた

す事、ひとへに亀にありといへとも、猶是

観自在尊の波浪不能没、即得涉所の

依怙となり給ふとよろこひおもひて、朝臣、

児を世になうかしつき給ふてけり。然とも、

そのかみ、ふるきねかひは、つゐにはたし給ふ

折なくて、高房身まかり給ひぬ。ちこもいは

けなき心に、いかて此御願はたしてんどのみ

常はおほしけるか、その比、遣唐使ありと聞

えし。名をは大神御井といふ。その人にあつ

らへつけて、彼つくり給はん、ほさちの御衣木を

人の国までたつねもとめ給ふ。則、沙金一百

両をもろこしへわたさる。御井、やかてもろ

こしにいたりて、清涼山仏母院にして、一の香

木を得たり。是梅檀香樹なりき。情々

事のやうを尋ぬるに、かの山のふもと東南

すみに大なる江あり。その中に余たとし

経て、光を放てる霊木あり。一人の聖人

是をとりて、此院の仏像をつくり奉らん

とせしか、こゝろさしをとけすして身

まかりぬといふ。御井、かの金を此山に施入

して、香木を和国に渡さんとしけるを、かの

国、時の帝のいさめにて、大かた、かなはさりけり。

さるを、御井いかゝ思ひけむ、みそかに香木

に銘をゑりて、海に投しぬ。その詞に云、

\*梅檀香木、長三尺六寸、周四尺八寸、其形方也。是日本

\*国越前守藤原朝臣高房胤子造<sup>二</sup>千手観音像、為<sup>二</sup>果

\*亡父<sup>一</sup>所宿願<sup>一</sup>、所<sup>レ</sup>誂<sup>レ</sup>香木也。靈精驗有守護冥衆愍。

此木、つゐにあきつ島ねにたゞよひきけり。

児もやうやくとし長、おとなに成給ふて、

才能人にすくれ、朝家の生まれ世にこえて、

元慶五年七月十二日幡磨守に任す。同

六年三月二日、西に下り給ひぬ。はりまにても

亀井寺といふを山のふもとにたて給ひける

とぞ。この寺の調度、おほくは亀の姿をゑり

付て侍りけるとかや。彼国の記などにも、いか

めしくかきのせたりとなん。ある時、守の御もとへ

士民来りていひけらく、明石の浦にこそ

あやしき木、海にありて、夜毎に光をはなつ

事、ものよりことなれと申。納言あやしひ

給ふて、海士ともおほくかつかせ見給ふに

しかの銘あり。御井も程なく帰朝して

事のよしを語るに、いよ／＼有難ふおほえて

みやこに帰りのほりて、妙像を造らんと覚し

けるに、撰津国嶋下郡、今の惣持寺にて

此霊木をしはらくうちをきけるか、又もた

けむとするに、ほと／＼あからさりけり。納言

あやしひていはく、此所に跡をたれ給ふ

へくは、ねかはくは、かろらかにあかり給ひてよ。

速にからんを建立して、尊像をあらはし

てん、とあれは、かろきこと本のことし。つゐ

花洛吉田の亭につきぬ。今の吉田の社

是也。かくあやしき事、世におほければ、

貴き聖人して造り奉らんとおほすに、



さる人あるましければ、納言、初瀬の御寺に参籠して祈申給ふ。七日といふ暁の夢に貴僧御帳の内より出てつけたまはく、汝帰らん時に、はしめてあひ見てん人を仏師と頼へし。あなかま、その人からの人のよしあしをいふへからすとあり。つとめて帰るさに、御寺の門のまへに十四五はかりの小童、あけまきもうちみたり、布衣かたをつりて、そのさまかたゐのやうなりしかとも、教のまに／＼つくり奉らむことを語りけるに、二月はしめの午の日に相かたらひて、納言はいそぎ国に下り給ひぬ。ちきりし日あやまたす童来れり。人皆此童をみて、うたかひをおこしけり。童もさあらんとさとりしりて、こゝろみのため一日一夜にして、たけ五寸の十一面の尊像を造。今、彼寺のこゝろみの観音是也。尊像殊妙にして、人皆うたかひを解けり。彼童のいはく、千手の尊像は、こと所に籠おめて千日のあいたに造り奉るへし。其間、毎に一度の供物を備よ。ゆめ仏所を見る事なかれといひて、いひしこと、ひかしに去て、方丈なる室に童子と御衣木とを籠めて、ひとつ

の窓をあけてそ、ものは供しぬ。はたして、千日満る。仁和二年五月十五日暁、あまつみそらに声ありて、長谷の観音やおはします／＼と三度までいひければ、ありし仏所のかたに声有て、ものいひさかなき行基かなといひて、仏所をはくえらかし、南をさしてさりぬ。納言いそぎ仏所を見給へは、三尺の千手の霊像まします。色相誠に尋常人の所為にあらず。いと柔和にして白毫眉間にめくり、慈悲の青蓮面転にひらく。四八相容備福聚、八十随好具愛敬。これそ長谷の観音まことに童男身を現して造り給ふなるへし。一千日の供ひとつもそこなはれずしてならへ置けり。二菩薩の尊容、悉く成すといへとも。いまた堂舎のかまへにはおよはさりき。然に、同四年二月四日、納言とし六十五にして薨し給ひぬ。遺息七男七女あり。心をあはせて、一寺数字の伽藍を撰州嶋下郡に宮作ありて、二尊利生の道場とし惣持寺と号しぬ。納言在生の時、件の仏跡に観音をうつしつくり、新

長谷寺と号す。草創のとき、春日大明神、白翁に現して頂上仏と宝冠の

阿弥陀仏とを授け給ふと也。南京長谷寺

の本尊のふまへさせ給ふ石座を分て、四尺

四方の礎礎の座に本尊を安座し奉る。

これ当寺十一面の御本尊にてわたらせ

給ふ。しかありしより、すなはち、吉田の神宮

寺と崇め奉る。その由来を尋るに、

むかし、 称徳天皇神護景雲元年

丁未のとし、春日大明神、常陸国鹿嶋より

三笠山へうつらせ給ふ時、御供に侍らひ

ける中臣の時風・秀行といひけるものに、

伊賀の国なはりの郡夏身の郷といふ所

にて神宣ありけらく、末の代に皇居

とならむ東にあたりてかならず垂跡あ

るへし。なれらかうみの子、やそつゝきたゆる

事なう仕へまつるへしと也。そのかみふた

りか中へ栗といふものたうひてけり。

それなん焼てけるにてありしを植をき

ければ、はたして生ひ出て、枝葉世に

さかへけり。此事のもとあるによりてこそ

後には、中臣の植栗の連とはいひしとなむ。

はたして、此神、約にたかはす、元慶六年  
壬寅とし四月中の子の日、平安城の東

神楽岡のふもとに降臨あり。その比、中

納言山蔭卿と申せし人、ある夜の夢に、

老翁一人、榊の枝を持って、南庭にたちやす

らふ。かれは誰そと問給ふに、我は開闢

の初より、天照大神の神勅によりて、天

孫にそひ奉りて、天日嗣を守り奉りし。

今、平安城の東に勝地を尋るに、此所

なりと宣ふ。依てその明日、庭上に下り

て三笠山にむかひて、神拝せられけるに

白鷺、榊の枝をふくみて宿所の東に飛

下り、又、白鹿四頭、忽然として来る。白鷺

ふくみたる所の榊の枝を山蔭卿に授く。

此奇瑞に感して、則社をたて春日大

明神を勧請せらる。新長谷寺も同し

卿の建立なれば、すなはち、吉田の神宮寺

とす。それより、数十年の星霜を経て、

一条の院の母后東三条の女院と申し

奉るは、大入道兼家公の御女、円融院の

皇后なり。当寺御再興の事ありて、

長保三年<sup>甲</sup> 寅年六月一日上棟、八月十八日

供養の日、慈恵大師の直弟恵心院の

僧都を導師とす。前後七日、紫雲たな

ひき、天華雪のことし。春日、若宮、白山

大権現、大弁才尊天御影向と云々。則、

当寺鎮守の社は也。彼女院、当社当寺

を御信仰あり。依て永延元年に

吉田の春日を勅祭になされ、同十一月

中の申の日、行幸勅ありて、右大臣清

丸公七世の孫、神祇大副卜部兼延宿祢

をあつかりとし、彼時風・秀行の二流の子

孫を祠官として、兼延宿祢に附下さる。

帝御崇敬ありて、卯月中の子の日

降臨の日なれば夏祭とし、十一月中

申の日、奈良祭に准して冬祭と

定め、勅祭になされけり。依て上撰

祿大臣より下土農工商に及ふまで、

敬信の首をかたふけすといふ事なし。

長和五<sup>丙</sup>辰年、御堂関白殿下御自

筆の御書を兼延宿祢に給はりて、

奈良の京にては、三笠山を氏社氏寺と

す。平安城の今は吉田を以て、三笠山に

准して崇敬あるへしと云々。抑、中納言

山蔭卿は房前卿より六世の孫、越前守

高房の御子、御母は真夏卿の御むすめ也。

文徳天皇の御宇、仁寿四年に初冠して、

昇進めてたく、中納言まで上り給ふ。此

卿、常に信心善根におはしまして、春日

の社、新長谷寺をたてたまひ、うみの

子のさかへめてたきも、ひとへに此社此寺

の応護にあるへきをや。しかれば、貴き

より賤に及ふまで、信心のまことを

いたし、利生のちかひをたのまさらめ

かも。

(研究紀要編集部は、編集発行規程第五条に基づき、本原稿の査読を論文審査委員会に依頼し、本原稿を本誌に掲載可とする判定を受理する、二〇〇七年五月八日付)。